中国短期大学紀要第13号（1982）

幼児の画面構成（その１）
５才児における「お話の絵」の空間表現についての一考察

浅　沼　拓　郎

１．は　じ　め　に

図式期（５～９才）にあたる幼児の描画表現は図記号(schema―共通のパターン化によってコミュニケーションし得る図示的記号）として生活の覚えを象徴的に描くと言われる。

井手（1969）は幼児が一般的に描く図記号は15種類程度，それを更に精察すると，基本となるものは６種類（基底線・人型・家・木・花・太陽）にしぼれると言っている。

幼児画の発達で，図式期段階への到達を知らせるものとして，先ず基底線（base-line)が取り上げられる。基底線の表出は幼児にとって，物の存在位置を示す手がかりとなり，すべての物がその上に存在するという意識の現れであり，外界を対象として見る視点がある程度定まり，平面である画用紙に外界を表わそうとする絵画表現の約束を示したことになる。

基底線の確立は，天と地，つまり空間認識のスタートであると考えてよい。

本研究は，そうした発達の段階をとらえたうえで，５才児に「お話を聞いて絵をかく」ことの課題を与え，初歩的な画面構成力（特に描き順で，初期ステップの後に及ぼす効果・影響）についての実態を調査するものである。

次に調査の結果を報告する。

２．方　　法

１）調査の対象

岡山市内幼稚園　２園，　総社市内幼稚園　１園，　倉敷市内保育園　１園

以上４園の５才児，151名を対象とした。その内訳は表１に示すとおりである。

表１　調査対象人数

園名／性別	S園（岡山市）	H園（岡山市）	I園（総社市）	O園（倉敷市）	計	%
男	13	18	44	12	87	57.6
女	14	15	25	10	64	42.4
計	27	33	69	22	151	
%	17.9	21.9	45.9	14.6		100.0

２）調査時期

昭和56年10月～12月

３）場　　所

各園，各保育室において

４）実施の方法

「おおきな　かぶ（蕪)」福音館版（絵本）を筆者が素話として聞かせ，幼児に自分の好きな場面を表現させた。（P.41 資料参照）

実施上の配慮　• 素話のため，情景を把みやすくゆっくり話す。

- 床面に個人のスペースを十分に与える。(模倣をふせぐため)
- 助言を避け，自由に表現をさせる。
- 幼児自ら「できた。」と申し出た時に作品を回収する。

5）材　　料　8ッ切（26cm×36cm）画用紙，　パス。

6）作品分析

作品の要素から分析観点を選び，更に本調査のための計測項目を決めた。

1．要素と観点

① 形態要素

画線の一般的な特徴（形・質・扱い）。　部分的な形態特徴（部分相互の関係）。

② 構成要素

構成の一般的な特徴（釣合いと配置）。　特殊な構成（強調・透視・背景）。

③ 動的要素

動的な一般的特徴（方向）。　行動の特徴。

④ 内容的要素

生物（人物・動物）。　自然物（木・山・太陽・雲）。　利用物（家・乗物等）

2．本調査の計測項目

① 画面における基底線の高さ

② 基底線に対する蕪の位置（上下関係）
画面における蕪の配置（左右関係）

③ 葉の表現（枚数，形，長さ）

④ 人物・動物の表現（人数，向き）

⑤ 太陽の表現（位置）

⑥ 空・雲の表現（塗り方）

7）計測方法　ビニール製透明方眼板（自作）を使用

3．結　　果

1）基底線の高さの表れ方

表1　基底線の高さ

性別＼cm		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9(以上)	計
男	頻度	8	0	7	11	13	10	9	4	6	19	87
	%	9.20	0.00	8.05	12.64	14.94	11.34	10.34	4.60	6.90	21.84	100.00
		(53.53)	(0.00)	(63.64)	(64.71)	(46.43)	(55.56)	(69.23)	(44.44)	(50.00)	(67.86)	(57.62)
女	頻度	7	0	4	6	15	8	4	5	6	9	64
	%	10.94	0.00	6.25	9.38	23.44	12.50	6.25	7.81	9.38	14.06	100.00
		(46.67)	(0.00)	(36.36)	(35.92)	(53.57)	(44.44)	(30.77)	(55.56)	(50.00)	(32.14)	(42.38)
計	頻度	15	0	11	17	28	18	13	9	12	28	151
	%	9.93	0.00	7.28	11.26	18.54	11.94	8.61	5.96	7.95	18.54	100.00

画面のどの高さに基底線を表出したかを調査したのが表1である。

151名中，基底線を表出しない者が9.93％である。そして2cmが，7.28％，3cmは11.26％，4cmでは18.54％と増加の傾向が見える。しかし，5cmで11.94％，6cmで8.61％，7cmで5.96％と漸減しながら，8cmの7.95％から9cm以上の18.54％へと再び増加が見える。

表出に２つの傾向が見え，４cm周辺（画面の$\frac{1}{6}$）と９cm周辺（画面$\frac{1}{3}$）あたりに僅かな偏りが見えた。性別においても同様の傾向を示してはいるが女は４cmを頂点に，男子は９cm以上を頂点にしていることが特徴である。

２）基底線に対する蕪の位置（上下関係）について

表２

蕪の位置 ＼ 基底線 cm		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
全地上	頻度	11	0	7	13	17	5	4	3	2	12	74
	%	14.86	0.00	9.46	17.57	22.97	6.76	5.41	4.05	2.70	16.22	
		(73.33)	(0.00)	(63.64)	(76.47)	(60.71)	(27.78)	(30.77)	(33.33)	(16.67)	(42.86)	(49.01)
$\frac{1}{4}$地中	頻度	0	0	0	1	5	4	2	1	2	1	16
	%	0.00	0.00	0.00	6.25	31.25	25.00	12.50	6.25	12.50	6.25	
		(0.00)	(0.00)	(0.00)	(5.88)	(17.86)	(22.22)	(15.38)	(11.11)	(16.67)	(3.57)	(10.60)
半分地中	頻度	0	0	2	2	3	2	2	1	4	3	19
	%	0.00	0.00	10.53	10.53	15.79	10.53	10.53	5.26	21.05	15.79	
		(0.00)	(0.00)	(18.18)	(11.76)	(10.71)	(11.11)	(15.38)	(11.11)	(33.33)	(10.71)	(12.58)
$\frac{3}{4}$地中	頻度	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	4
	%	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	25.00	25.00	50.00	
		(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(11.11)	(8.33)	(7.14)	(2.64)
全地中	頻度	0	0	2	0	2	5	3	3	3	9	27
	%	0.00	0.00	7.41	0.00	7.41	18.52	11.11	11.11	11.11	33.33	
		(0.00)	(0.00)	(18.18)	(0.00)	(7.14)	(27.78)	(23.08)	(33.33)	(25.00)	(32.14)	(17.88)
不明	頻度	4	0	0	1	1	2	2	0	0	1	11
	%	36.36	0.00	0.00	9.09	9.09	18.18	18.18	0.00	0.00	9.09	
		(26.67)	(0.00)	(0.00)	(5.88)	(3.57)	(11.11)	(15.38)	(0.00)	(0.00)	(3.57)	(7.28)
計	頻度	15	0	11	17	28	18	13	9	12	28	151
	%	9.93	0.00	7.28	11.26	18.54	11.92	8.61	5.96	7.95	18.54	

表２は，蕪の位置と基底線の高さについて相関を調査したものである。

結果によれば，蕪の全地上表現が圧倒的に多く49.01％に達し，全地中が17.88％，半分地中が12.58％，$\frac{1}{4}$地中は10.60％となっており，$\frac{3}{4}$地中についての出現は2.64％と極めて低くなっている。

さらに全地上表現と基底線の高さの相関を見ると，０cmのとき（基底線はときに紙の下辺の切線をそのまま代用させることもある。）では位置割合の14.86％にあたる。１cmでは出現が無い。２cmで9.46％，３cmで17.57％，そして４cmでは22.97％と全地上の最高を示している。

また，５cmからは6.76％，６cmが5.41％，７cmが4.05％，８cmは2.70％と漸減のようすを示す，しかし９cmでは再び16.22％と増加を示している。

このことから，表１の結果であった基底線の高さ４cm（画面の約$\frac{1}{6}$），９cm（画面の約$\frac{1}{3}$）あたりへの集中の傾向が重なることから関連の深さを知ることができる。

次に全地中表現と基底線の相関では，３cmまでの表現が少なく４cmあたりから一応の表出を見ることができる。９cmで33.33％の高率を示すが，，これは地中表現の操作可能ということから有意な結果であろう。

つづいて，半地中表現では著しい差は見られない。また$\frac{1}{4}$地中表現でも４cm，５cmあたりに僅かにピークを見るが意志的には全地上表現に準じた操作現象と言える。

$\frac{3}{4}$地中表現についても全地中に準じたものと見てよいであろう。

図１　画面測定の基準と範囲

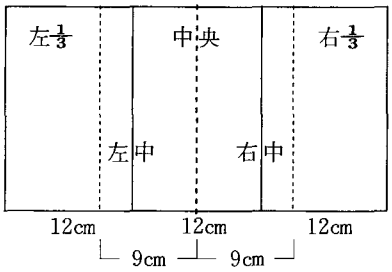


表３　年令と蕪の位置

生活年令＼蕪の位置		不明	左$\frac{1}{3}$	左中	中央	右中	右$\frac{1}{3}$	全	計
6年以下	頻度	6	18	5	19	5	6	1	60
	%	10.00	30.00	8.33	31.67	8.33	10.00	1.67	
6年以上	頻度	4	33	15	22	5	12	0	91
	%	4.40	36.26	16.48	24.18	5.49	13.19	0.00	
	頻度	10	51	20	41	10	18	1	151
	%	6.62	33.77	13.25	27.15	6.62	11.92	0.66	

3）画面における蕪の位置（左右関係）について

１．測定の基準と範囲の判断（図１による）

画面を３等分して中央，左$\frac{1}{3}$，右$\frac{1}{3}$とする，それぞれの中間にかかる場合を，左中，右中と判定。

表３は，上記基準により表出の状況を調査したものである。

全体としての蕪の表出範囲を見ると，特に左$\frac{1}{3}$が33.77％の高率を示し，つづいて中央の27.15％となっている。なお左中を左寄り志向として加えれば全体の74.14％を占め圧倒的である。

4）蕪の位置（左右）と人物・動物の表れ方について

本調査に使用した課題（物語）からは，内容表現となる人物と動物は継時的に構成されるもので，従って人物３人の表現が先行されることが動物表現に大きくかかわってくる。

表４－１で蕪の位置と人物表現の相関を見る。

先ず出現人数を比較すると３人が62.25％，２人が15.89％，１人が12.58％と３人の占める率が圧倒的に高い。

なお，３人の出現を位置別に見ると，左$\frac{1}{3}$の43.62％，次いで中央の22.34％，そして左中の11.70％となり左寄りは全体の76.17％を占めており２人，１人の表現でも左寄りがむしろ高率を示す傾向を示している。

表４－１　蕪の位置と人物表現

蕪の位置＼人物数		0(人)	1(人)	2(人)	3(人)	計
左$\frac{1}{3}$	頻度	0	3	7	41	51
	%	0.00	5.88	13.73	80.39	100.00
		(0.00)	(15.79)	(29.17)	(43.62	(33.77)
左中	頻度	1	4	4	11	20
	%	5.00	20.00	20.00	55.00	100.00
		(7.14)	(21.05)	(16.67)	(11.70)	(13.25)
中央	頻度	3	9	8	21	41
	%	7.32	21.95	19.51	51.22	100.00
		(21.43)	(47.37)	(33.33)	(22.34)	(27.15)
左中	頻度	0	0	3	7	10
	%	0.00	0.00	30.00	70.00	100.00
		(0.00)	(0.00)	(12.50)	(7.45)	(6.62)
右$\frac{1}{3}$	頻度	1	3	1	13	18
	%	5.56	16.67	5.56	72.22	100.00
		(7.14)	(15.79)	(4.17)	(13.83)	(11.92)
全	頻度	0	0	1	0	1
	%	0.00	0.00	100.00	0.00	100.00
		(0.00)	(0.00)	(4.17)	(0.00)	(0.66)
不明	頻度	9	0	0	1	10
	%	90.00	0.00	0.00	10.00	100.00
		(64.29)	(0.00)	(0.00)	(1.06)	(6.62)
計	頻度	14	19	24	94	151
	%	9.27	12.58	15.89	62.25	100.00
		(100.00)	(100.00)	(100.00)	(100.00)	

表４－２　蕪の位置と動物表現

蕪の位置＼動物数		0	1(匹)	2(匹)	3(匹)	計
左$\frac{1}{3}$	頻度	10	6	10	25	51
	%	19.61	11.76	19.61	49.02	100.00
		(15.15)	(60.00)	(58.82)	(43.10)	(33.77)
左中	頻度	12	0	2	6	20
	%	60.00	0.00	10.00	30.00	100.00
		(18.18)	(0.00)	(11.76)	(10.34)	(13.25)
中央	頻度	26	3	3	9	41
	%	63.41	7.31	7.32	21.95	100.00
		(39.39)	(30.00)	(17.65)	(15.52)	(27.15)
右中	頻度	5	0	0	5	10
	%	50.00	0.00	0.00	50.00	100.00
		(7.58)	(0.00)	(0.00)	(8.62)	(6.62)
右$\frac{1}{3}$	頻度	3	0	2	13	18
	%	16.67	0.00	11.11	72.22	100.00
		(4.55)	(0.00)	(11.76)	(22.41)	(11.92)
全	頻度	1	0	0	0	1
	%	100.00	0.00	0.00	0.00	100.00
		(1.52)	(0.00)	(0.00)	(0.00)	(0.66)
不明	頻度	9	1	0	0	10
	%	90.00	10.00	0.00	0.00	100.00
		(13.64)	(10.00)	(0.00)	(0.00)	(6.62)
計	頻度	66	10	17	58	151
	%	43.71	6.62	11.26	38.41	100.00
		(100.00)	(100.00)	(100.00)	(100.00)	

表４－２では，動物表現数の減少はあるが，人物表現と同様な傾向を示しており左$\frac{1}{3}$への出

現がやはり高率である。なお注目すべきことは，右$\frac{1}{3}$の人物，動物の出現率が同じということで，これは課題（物語）の内容表現についての完成度が高いことを示している。

5）蕪の位置と太陽の表われ方

表5　蕪と太陽の位置

蕪の位置＼太陽位置		無	左	中央	右	計
左$\frac{1}{3}$	頻度	24	9	2	16	51
	%	47.06	17.65	3.92	31.37	33.70
左中	頻度	6	6	0	8	20
	%	30.00	30.00	0.00	40.00	13.25
中央	頻度	19	3	1	18	41
	%	46.34	7.32	2.44	43.90	27.15
右中	頻度	6	3	0	1	10
	%	60.00	30.00	0.00	10.00	6.62
右$\frac{1}{3}$	頻度	6	6	0	6	18
	%	33.33	33.33	0.00	33.33	11.92
全	頻度	0	0	0	1	1
	%	0.00	0.00	0.00	100.00	0.66
不明	頻度	9	1	0	0	10
	%	90.00	10.00	0.00	0.00	6.62
計	頻度	70	28	3	50	151
	%	46.36	18.54	1.99	33.11	(100.00)

本調査で太陽は課題(物語)の内容としては無いが，図式期の一般的特徴として太陽の出現が予想され設定した項目である。

表5によれば，太陽の出現が56.64％であり，この期では課題にかかわらず可成り表出されることがわかる。

位置では右寄り（中央，右）が35.10％，左は18.54％となっている。

画面構成の観点から蕪の位置と太陽の位置の相関を見ると蕪の左寄りに対し太陽の右寄りと対応しているようである。しかし意図的な操作がどこまでであるかは，今後の考察によって明らかにしていきたい。

4．考　　察

1）基底線の高さと表われ方の類型について

基底線の高さについては，表2により画面の$\frac{1}{6}$，また$\frac{1}{3}$あたりの高さに偏る傾向を示したが，表現活動の経過についてさらに分析を進めたところ，次のような表現類型が多いことがわかった。

1．典型的な図式型。写真1

先ず，強い勢いで基底線を引き，左側（$\frac{1}{3}$寄り）に蕪を配置して，人，動物は話の筋に従い並列表現する。そして，家，太陽，空（横の線描は消え，雲形が多い）を描き加える。

これらは，典型的な図式期の表現と言えよう。話を知っている幼児の描く共通パターンである。

2．基底線を変更する型。写真2

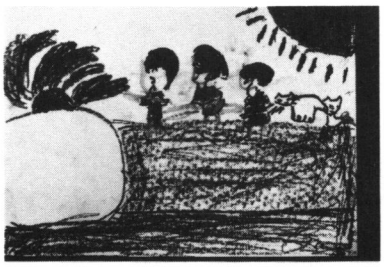
基底線を一度は描くが，蕪の大きさ，人の位置などの都合により中途から高さを変更する。

この例も多く，基底線の図式的出発から，部分の相互関係による構成の変更を行うことを考えはじめた。成長を示す一過程であろう。

写真1

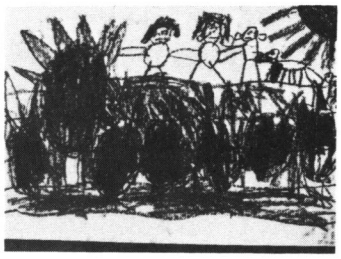
（女）　50.5.27生

写真2



（女）　50.7.10生

写真 3



（男） 50.10.30生

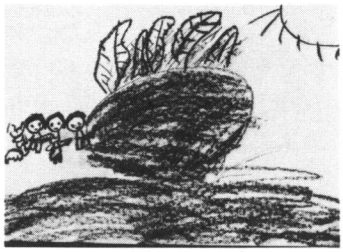
3．基底線の複数型。写真 3

少数の例ではあったが，基底線の複数表出を見た。この期では積上げ表現と呼ばれることもあるが，遠近を表わすとされている。広い畑の中で，この蕪はこんなに大きいと，他との比較により表わしかったのであろう。

2）蕪の位置による人物，動物の表われ方について

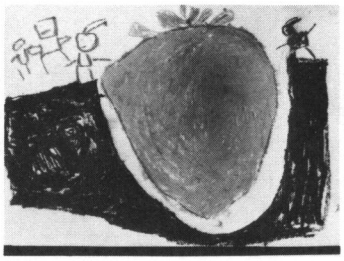
蕪の位置は内容表現の主題にあたり，構成の最も最も重要な鍵である。表 4 において，特に左寄り傾向の大きいことを知った。左寄りは，この物語における継時的構成（描く時間的順序と方向）に，次のようなかかわりを示した。

写真 4



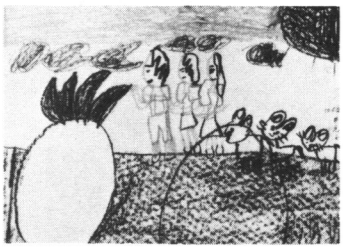
（男） 50.7.21生

写真 5



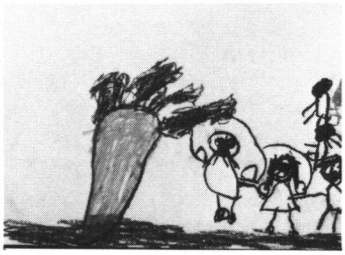
（男） 50.12.31生

写真 6



（女） 50.6.12生

写真 7



（男） 50.6.2生

写真 4．5

物語で筋の把え方は，発達上の一般的側面も影響し個々に差異があることは当然であるが，この物語の絵においては概して，直観的に把えた者には蕪の中央配置が多く，しかも大きな蕪になっている。

従って，人物，動物の継時的構成がストップされるため内容となる動物表現までに至らないことが起るとも考られる。

写真 6．7

基底線と蕪の線の交差による失敗感と，蕪の移動による修正，また，人物，動物等の内容的なものの方向の変更による構成のくふうが多数見られる

ここに取り上げた種類の作品例については，まだ151点の作品からは一部でしかないが，他に多種多様ながら類型として今後整理していきたい。

ま　と　め

5才児の「お話の絵」における画面構成について調査をすすめ，次の結果を得た。

1．基底線の表出には2つの傾向が見え，高さの決定については，画面の$\frac{1}{6}$・$\frac{1}{3}$のあたりに偏った表現がされる，性別では女子は$\frac{1}{6}$，男子$\frac{1}{3}$のあたりに偏っていたのが特徴であった。

2．基底線に対する蕪の位置（上下）の表出では，全地上表現が49％を占める高率で，それは基底線$\frac{1}{6}$あたりとの関連が深く。物語の結末に構成の山場を幼児が感じていることである。

3．蕪の位置（左右）の表出傾向は，左側$\frac{1}{3}$範囲が最も多く33.77％であるが，左中なども含め左寄りとして見れば74.14％と圧倒的な高率であった。

4．蕪の位置（左右）と人物・動物表現の関係では，蕪の左寄りで人物表現は76.16％の高率である，動物表現まで及ぶのは左側$\frac{1}{3}$配置に限られていた。

5．太陽は話の内容では無いが，図式期の特徴らしく56.64％と過半数の出現を見た。

以上，5才児では図式概念を残しつつも，分析によれば多種の新たな類型をもちつつ成長していくことがわかる。今後は知能発達また一般的側面からの項目を加えた調査研究の必要を感じている。

本調査は中国短期大学昭和54年度研究補助金で行う一部であり今後継続するものである。

なお調査のためこころよく資料提供に御協力いただいた，倉敷市立大内保育園，岡山市立白石及び芳泉幼稚園，総社市井尻野幼稚園の園長先生をはじめ諸先生方，本学，北川歳昭氏に深甚な感謝の意を表します。

参　考　文　献

新編・幼年期の美術教育　井手則雄　誠文堂新光社
幼児教育法　絵画製作・造形　〈理論編〉　三晃書房
子供の絵の世界　グッドナウ／須賀哲夫訳　サイエンス社
美学事典　竹内敏雄編集　弘文堂

資　　料

おおきな　かぶ（内田莉莎子　再話より　　福音館書店版）

おじいさんが　かぶをうえました。　「あまい　あまい　かぶになれ。　おおきな　おおきな　かぶになれ。」　あまいげんきのよい　とてつもなく　おおきい　かぶができました。

おじいさんは　かぶをぬこうとしました。　　うんとこしょ　どっこいしょ　ところが　かぶはぬけません。

おじいさんは　おばあさんを　よんできました。　おばあさんが　おじいさんをひっぱって　おじいさんが　かぶをひっぱって　　うんとこしょ　どっこいしょ　　それでも　かぶはぬけません。　おばあさんは　まごをよんできました。

まごが　おばあさんを　ひっぱって　おばあさんが　おじいさんをひっぱって　　うんとこしょ　どっこいしょ　　まだまだ　かぶはぬけません。　まごは　いぬをよんできました。

いぬが　まごをひっぱって　まごが　おばあさんをひっぱって　おばあさんが　おじいさんをひっぱって　　うんとこしょ　どっこいしょ　　まだまだ　まだまだ　ぬけません。　いぬは　ねこをよんできました。

ねこが　いぬを　ひっぱって　いぬが　まごをひっぱって　まごが　おばあさんをひっぱって　おばあさんは　おじいさんをひっぱって　おじいさんはかぶをひっぱって　　うんとこしょ　どっこいしょ　　それでも　かぶはぬけません。　ねこは　ねずみを　よんできました。

ねずみが　ねこをひっぱって　ねこが　いぬをひっぱって　いぬがまごをひっぱって，まごが　おばあさんをひっぱって　おばあさんが　おじいさんをひっぱって　　うんとこしょ　どっこいしょ

やっと　かぶはぬけました。